

文献紹介

高原正文 著

『安曇野史への招待』

信毎書籍出版センター

2011年11月 388頁 2,381円＋税

安曇野市の前身は長野県豊科町、著者はこの地の出身で多年郷土の研究に従事され、この度1書にまとめられた。書名から一般向きの読物と思わせるが実は多年の研究成果を集成された本格的な論文集である。豊科中学校の出身で、そこでの恩師で地方史研究家である服部祐雄氏（元安曇村教育委員長）が推薦の辞を寄せている。学部・大学院とも早稲田大学でそこでの専攻学科は意外にもドイツ文学、本書の内容とドイツ文学とは全く関係がない。早稲田大学で受講した演劇学から学ぶところがあり、その視点を導入した所もあるという。永く豊科町の博物館に勤務され、学芸員、館長を勤められた。

著者の本書における研究姿勢は文献には出てこない歴史の解明のための「わらじ史学」だという。キーワードとして暮らし、信仰、生活環境、景観をあげる。実地調査主体の研究である。実地調査重視の我々地理学徒から見ると当然の感があるが史学の方ではそうではないのだろう。「わらじ史学」の提唱は意義のある主張と思われる。

以下章節の順序に従い内容を紹介する。本書では章節の番号を附していないので紹介者の方で適当に番号を附した。

〔一〕安曇族

- (1) 海人安曇族の信濃来訪と開拓

〔二〕道祖神信仰

- (1) 長野県南安曇郡豊科町を主としたる道祖神形態考
- (2) 奇祭福俵引きについて
- (3) 道祖神御柱をめぐる一考察

〔三〕祭礼・芸能

- (1) 大宮熱田神社例祭の獅子舞
- (2) 熊野神社お船祭り
- (3) 豊科町の祭礼・芸能

〔四〕諸職と食

- (1) 有明紬（天蚕）

- (2) 安曇野のわさび栽培とその沿革

- (3) 西山地方の郷土食 おやきとエゴ

〔五〕村落景観

- (1) 近世成相新田宿の村落史
- (2) 近世筑摩郡光村の村落景観
- (3) 近世筑摩郡北栗林村の村落景観と生活

〔六〕古道

- (1) 近世の村の道

〔七〕生活環境の歴史的変遷

- (1) 安曇平における生活環境と在郷町の変貌
- (2) 安曇野市中心市街地の近代史

〔附〕学芸回想

- (1) 福俵をめぐる初期論考の思い出
- (2) 追憶、小穴芳実先生

1章安曇族では海洋民族がなぜ山間部の松本盆地に進出したかを問題とする。大和朝廷との関係、砂鉄産地の存在、交通路としての姫川溪谷、ひすいの産地等を検討しているがこの問題はなお今後の課題と言えよう。

2章の道祖神信仰は道祖神、特に双体道祖神が多数存在することで信州の中でも特に分布密度の濃い地域であるだけに特に力のこもった章になっている。1節において先ず双体道祖神を形態・持物等で数種に分類して分布を論じている。更に文字碑も多数分布するとのことでそれが化政期以降に集中する。その要因として教育の普及により文字碑が多くなったとしている。2節では市神にも関係する福俵引きにつき、その方法を詳論し、その寓意として演劇も考慮して検討している。3節では道祖神信仰で重要な役割を果す御柱につき数ヶ所の事例について詳論し、その意義を考察している。

3章では本地域の祭礼行事として大宮熱田神社の獅子舞・熊野神社のお船祭り等を取り上げ、行事の次第・構成・演目等を詳述している。熊野神社で山車を船の形に作り、お船と呼んでいるのは海洋民族以来のものと見てよいだろうか。

2章と3章とは民俗学的テーマであり、民俗学を得意とする著者の会心の作で充実した内容である。紹介者がこの方面に不勉強で適切な紹介がで

きないことを残念に思う。

4章では産業として有明紬とわさび、郷土食としておやきとエゴを取り上げる。有明紬とわさびについて生産工程が詳述されるが統計を利用しての盛衰の検討や分布については扱われていない。

5章の村落景観で近世の3つの村が取り上げられる。2節の光村と3節の北栗村は純農村であるが1節の成合新田宿は後年の豊科であり、在郷町である。ここは仁科街道の宿駅であり、街道中央に馬用の用水を流しそれに沿って柳が植えられ、元禄期には九斉市が開かれ（享保期からは六斉市）、市神もあったという。

6章の古道、一般的には交通史のテーマで主要街道が論ぜられる。本地域にも塩の道として著名な糸魚川街道があるが、本稿では主要街道だけでなく、村内を結ぶ道、隣村を結ぶ道、参詣道、農耕のための道、祭礼のための道、市道と大小多種類の道を検討している。

7章の課題は在郷町豊科である。1節で近世から明治前期まで2節でそれ以降が論ぜられる。近世松本藩には在郷町として大町・池田・穂高と成

相新田（後年の豊科）の4ヶ所があった。大町と池田には藩の出先機関である御他屋があり、穂高は水運の便があってそれ等を欠く成相新田より優位にあった。明治になって豊科に郡役所が設置され、他の諸機関も置かれて優位に立った。著者のいう郡都である。更に蚕種業がさかんになり豊科は繭や蚕種仲買いの仲継地となって繁栄し花柳界も形成された。篠ノ井線の開通で穂高の水運の便が失われ、同線明科駅と豊科駅間の道路が開けて穂高が衰え豊科が有利になった。

大正期になって郡制・郡役所の廃止で郡都の地位を失ったが、工場誘致に成功して発展することになった。7章では人文地理の手法が活用され、我々にとっては親しみやすい章になっている。

附章として初期の研究の回想と先学小穴芳実の追憶が語られる。

各章節が独立した別のテーマの論考なので全体を取りまとめ豊科の歴史を概観できる1章が欲しかったと思う。

すぐれた地域史として一読をおすすめしたい。

（中島義一）